日本中世英語英文学会

第 26 回西支部例会

日時：　2010 年 6 月 12 日（土）12:45～17:50

会場：　関西外国語大学（中宮キャンパス）

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16 番 1 号
TEL　072-805-2801（代）
http: //www.kansaigaidai.ac.jp/

総　　会　　2 号館 2 階 16 教室

研究発表　　2 号館 2 階 16 教室

講　　演　　2 号館 2 階 16 教室

懇 親 会　　厚生北館 2 階 第 2 食堂

日本中世英語英文学会西支部事務局
〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1
関西外国語大学、吉村耕治（2430）研究室内
TEL：072-805-2801（内線 2535）
E-mail： yoshim-k@kansaigaidai.ac.jp
ゆうちょ銀行・振替口座番号： 00940-9-157053
加入者名： 日本中世英語英文学会西支部

日本中世英語英文学会
第 26 回西支部例会プログラム

I　受付　（12:00～15:00）（関西外国語大学、2 号館 2 階 16 教室の前）

II　開会式および西支部総会（12:45～13:25）　司会：　尾崎久男（大阪大学准教授）

〔開会式〕　（2 号館 2 階 16 教室）

日本中世英語英文学会会長挨拶　中尾佳行（広島大学教授）

開催校挨拶　谷本義高（関西外国語大学学長）

日本中世英語英文学会事務局報告　西村秀夫（姫路獨協大学教授）

〔西支部総会〕　（2 号館 2 階 16 教室）

事務局報告・会計報告　吉村耕治（関西外国語大学短大部教授）

会計監査報告　海老久人（神戸女子大学教授）

開催校ご案内　吉村耕治

III　研究発表の部（13:25～15:25：一人 40 分；発表 30 分、質疑応答 10 分）

研究発表 1（13:25～14:05）　司会：　浅香佳子（大阪国際大学教授）

An Interpretation of Chaucer's speaking animals in the *Parliament of Fowls*

Simona Alias（PhD Student at Trento University, Italy）

研究発表 2（14:05～14:45）　司会：　秋篠憲一（同志社大学教授）

"The Fair Unknown" と "the Poor Well-known"

― Malory における Gareth と Balin ―

小宮真樹子（同志社大学非常勤講師）

研究発表 3（14:45～15:25）　司会：　石坂 恒（関西大学教授）

異教徒トロイラスの "the lawe of kynde"と"ex puris naturalibus"

浅香佳子　（大阪国際大学教授）

休憩　（15:25～15:45）

IV　講演の部（15:45～17:45：一人 60 分）　（2 号館 2 階 16 教室）

講演 1（15:45～16:45）　司会：吉村耕治（関西外国語大学短大部教授）

チョーサーとガウェイン詩人の言語観

―「荘園管理人の話」と『ガウェイン卿と緑の騎士』を中心に ―

菊池清明（立教大学教授）

講演 2（16:45～17:45）　　司会：　笹本長敬（大阪商業大学教授）

The Destruction of Troy: A Critical Edition　の編纂を終えて

松本博之（元豊田工業大学教授）

V　閉会の辞　（17:45～17:50）　　吉村耕治（関西外国語大学短大部教授）

VI　懇親会（18:00～19:50）　　司会：　尾崎久男（大阪大学准教授）

懇親会場：　関西外国語大学、厚生北館 2 階、第 2 食堂

会費：　3,000 円　（学生・大学院生は 2,500 円）

注意事項：

１．乗用車でお越しの方は、東門か西門をご利用ください。正門は歩行者専用です。

２．会員、発表者、司会者の控室は、2 号館 2 階 15 教室です。昼食ご持参の方は、会員控室（2215 教室）をご利用ください。

３．館内は全館禁煙となっております。指定の喫煙所を設けてございますので、そちらをご利用ください。

４．2010 年度より西支部の会費制度は、一般 2,000 円、非常勤講師・退職者・学生・大学院生 1,000 円、70 歳以上で一般会員として 20 年以上経過した方の終身会費 10,000 円の 3 種類になっています。当日のみ参加の方は、当日会員会費をして 500 円を申し受けます。

５．懇親会費（3,000 円、学生・大学院生 2,500 円）は、当日、受付でお納めください。

研究発表１：要旨

An Interpretation of Chaucer's speaking animals in the *Parliament of Fowls*

Simona Alias（PhD Student at Trento University, Italy）

The origin of the tradition of personified and speaking animals is as old as storytelling and literature itself. We have knowledge of tales having as speaking protagonists animals in ancient Indian literature, such as can be seen in the *Pañcatantra* and in the early Buddhist tradition. In the Classical world we have Aesop's fables and the tradition that descended from it, flourishing during the Middle Ages both in such works as the *Roman de Renart* and in *exempla* and bestiaries, where animals are given also human physical characteristics. But the anthropomorphization of animals is a common feature of many different cultures. The process is certainly well known in the East: the aforementioned Indian tradition is rich and abundant, but Chinese folklore as well displays a long tradition of speaking animals, as does the Japanese lore partly as a result of the influence of Chinese culture.

I will present a comparison between the characteristics of the personified animals in Chaucer's *Parliament of Fowls* and the features of animal personification in the Japanese literary tradition. This comparative study aims at investigating similarities and differences in technique and function between two distant worlds in the use and realization of this successful method of literary representation. The focus will be on the English poem, but I will provide examples from Japanese literature to be compared with the Middle English work. The approach will be comparatistic, but also eco-critical, focusing on the representation of nature and the relation between nature and man that emerges from the two modes of personifying animals, the Western (Middle English) and the Eastern (Japanese).

研究発表 2：要旨

“The Fair Unknown” と “the Poor Well-known”

― Malory における Gareth と Balin ―

小宮 真樹子（同志社大学非常勤講師）

Andrew Lynch は Malory に登場する騎士 Balin の分析を行った際、彼の名前が不幸の源であると論じた。卑しい生まれの騎士は、たとえ高貴な騎士と同じ振る舞いをしたところで、周囲の人々から悪意ある解釈をされると考えたのである。

他方で、敢えて立派な血統を隠した Gareth の冒険は、Balin の物語と興味深い対比を示している。乙女 Lyonesse を救出に向かう途上、Gareth は正体を明かさず、宮廷を訪れた理由を “to preve my frendys” と告げる。

しかし、この試みは完全に成功したとは言い難い。Beaumayns と名乗り、召使に身を窶していた Gareth に対して、Launcelot と Gawain は親切だったとあるが、前者の場合は高貴な行いだと賞賛される一方で、後者の場合は血の繋がった兄なのだから当然だと述べられる。両者ともに Beaumayns の正体を知らなかったにも関わらずである。

また、冒険の最中に黒騎士から侮辱された Gareth は、“I am a jantyllman borne, and of more hyghe lynage than thou” と怒りを示す。血筋という柵から自由になろうとしているように見えて、Gareth の物語は、いかに騎士の振る舞いが生まれによって左右されているかを暴いているのである。

名を隠すことで自らの実力を示そうとした Gareth と、立派な名を持たないがゆえに実力を認められない Balin は、いずれも悲惨な末路を辿る。実の兄弟との絆を絶とうとした Gareth は、兄よりも慕っていた Launcelot に殺され、盾を換え自らの名を隠蔽した Balin は、知らずに兄弟の Balan と殺しあうことになった。

本発表は、「名前」の中に幽閉された二人の騎士たちの比較を通して、Malory における fraternity と kinship の問題を考察するものである。

研究発表３：要旨

異教徒トロイラスの

“the lawe of kynde” と “ex puris naturalibus”

浅香 佳子 （大阪国際大学教授）

『トロイラスとクレシダ』（*Troilus and Criseyde*: *Book III*）の “So wolde God, that auctour is of Kynde” (III, 1765) については、1）“So would to God, who is the creator of Kynde.” あるいは、2）“So would to God, the creator is born of Kynde.” の二通りの解釈ができるだろう。1）の God はユダヤ・キリスト教の世界の創造神であり、2）は Kynde に由来する神、すなわち自然に内在する神である。

2）と考えた場合、『トロイラスとクレシダ』の “the lawe of kynde” が、C. S. Lewis の言うように、チョーサーの “an absolute moral standard” (*Studies in Words*, p.61) や “ethical ablolute” (G. W. Dunleavy, 1983) であるとは考えにくい。むしろ “The lawe of kynde” は「自然の生成力」を意味しており、チョーサーは最後の第 5 巻において、異教、すなわちギリシャに見られるような自然宗教の世界において、人間がキリスト教的な自然を超越する絶対的な秩序に従って存在することの限界を示そうとしていると思われる。トロイラスとボエティウスはキリスト教の世界へと引き込まれてはいるが、結局トロイラスが到達したものは「純粋な、生まれながらにもつ自然の素質から」(“*ex puris naturalibus*”) 得られる異教徒の完璧さである。トロイラスはギリシャ的自然、すなわち異教の自然世界のはかなさを体現している。チョーサーの真の意図は、自然を超越する絶対的なモラルを描くことではなく、生産性のある美しいギリシャ的自然を描くことにあったと思われる。

講演１：要旨

チョーサーとガウェイン詩人の言語観

―「荘園管理人の話」と『 ガウェイン卿と緑の騎士』を中心に ―

菊池 清明（立教大学教授）

チョーサーとガウェイン詩人、二人の「英語」あるいは「方言」へのこだわりが、彼らの作品の中でどのような結果をもたらし、さらにはそれがその後の英文学の特質とどのように関わり、どのような意味合いをもつことになったのか。二人の詩人に共通して見られる英語/方言の使用、文体的個別性、そして詳細な人物描写の根底にあるものは何であろうか。とりわけ方言という言語表現に注目しながら、二人の詩人の「言語観」、さらにはそれに密接に連関する「個」の意識を考えてみたいと思う。

二人の詩人に見出される「個」への意識の深淵にあって、二人の詩人をいつも方向づけたのは、＜英語＞でイギリス人、イギリス人の文化、そしてイギリスという国家を語ることであった。そして、その意識、あるいは拘泥とは、優秀な民族、そして豊かな文化、さらには発展した文明のしるしであろう。それは、自己に対する自覚と誇りを示すものに他ならないからである。英語に、そして方言にさえ適切な自信をもつことが自国語文学を発展させる基本であり、ラテン文化を脱し、イギリスの自立を確立させるためには自国の風土や文化に根ざした創作的な試みが必要であった。

14 世紀の英語という言語/方言に象徴される俗（vulgar）/民衆/周縁の文化を尊重することから、新たな文学の地平が開けることを、すでにこの二人の詩人は理解していたのである。しかも、こうした「個」の意識という行為が自分の国語で、さらには方言という媒介によってこそ最も高められることを、中世イギリスにおいてこの二人ほど心得ていた詩人はいない。

講演２：要旨

The Destruction of Troy: A Critical Edition の編纂を終えて

松本 博之（豊田工業大学名誉教授）

中世イギリス研究資料センターのコンコーダンス・プロジェクトの一環として、中世英語頭韻詩の中で最も長い作品である *The Destruction of Troy* を採りあげた。コンコーダンス化の準備段階として、唯一の刊本である EETS 版が信頼できるテクストかどうか確認するために、写本と刊本の校合を行った。その結果、EETS 版がかなり杜撰なテクストであることが判明した。*OED* も *MED* も、この EETS 版に基づいて例文を引用しているので、重大なエラーについては *English Studies* 誌上などで公表した。

第２段階として Diplomatic Edition を作製するために、写本を所蔵している Glasgow 大学図書館に当該写本のカラー・スライドを作製してもらい、それをデジタル・イメージ化し、活字化したページと対になるように組み込んだ。この成果は、SEENET（The Society for Early English and Norse Electronic Texts）によって、ミシガン大学出版局より CD 版で 2002 年に出版された。

第３段階として Critical Edition の編纂にとりかかった。同時にテクストのコンコーダンス化も行いつつ、Annotation、Glossary を作成していった。

以上がテクスト編纂の概略であるが、その間に同一の原典に基づく Troy Legend である *Lydgate's Troy Book* および *The Laud Troy Book* のコンコーダンス化も行い、*The Destruction of Troy* との比較に利用した。特に問題となっていることは、これら三作品の年代である。リドゲイトの作品は、1412 年に翻訳（翻案）を始め、1420 年に完成していることが明示されているので、この作品を基準にして他の二作品を比較すると、ある程度制作年代が分かるかもしれないと考えて、いくつかの項目を設定して比較してみたが、方言の問題などが介在して簡単には解決しなかった。今後の課題として残った。